

IV-233

高水敷のせせらぎに関する研究

㈱アルゴ都市設計 正会員 長屋 静子

東京農業大学教授 正会員 鈴木 忠義

建設省土木研究所 正会員 島谷 幸宏

1. はじめに

河川の高水敷の利用は、近年、盛んに行われるようになり、ゴルフ場や野球場、運動グラウンド等の利用に当てられている。ちなみに、東京近郊の河川では、東京都足立区新田から埼玉県熊谷市までの50.4km間に、河川敷利用のゴルフ場が13箇所あり、平均4.2 kmごとにゴルフ場が立地しているのである。

しかし、河川空間においては、単に不足している都市スポーツ施設の補充の場に当てるだけでは不十分であり、河川ならではの本来的な利用がなされることが重要である。

本報では日本各地で行われている、高水敷のせせらぎ（高水敷に本川と分離して、小川のように流れ、水遊び等の親水行為に適した部分）にスポットを置き、どのように利用されているかの実態調査を基に、高水敷の利用のありかたを示した。

2. 高水敷のせせらぎ利用の実態

(1) 馬見ヶ崎川における利用と那珂川における利用の比較

高水敷にせせらぎがある河川として山形県山形市の一級河川である馬見ヶ崎川を対象河川として、せせらぎが無い普通の河川として茨城県桂村の一級河川である那珂川を対象として夏季のヒアリング調査を行った。なお、馬見ヶ崎川では、49グループ310人、那珂川では43グループ590人である。

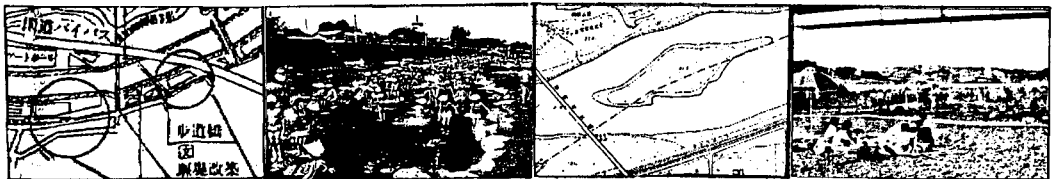


図2-1 馬見ヶ崎川平面図

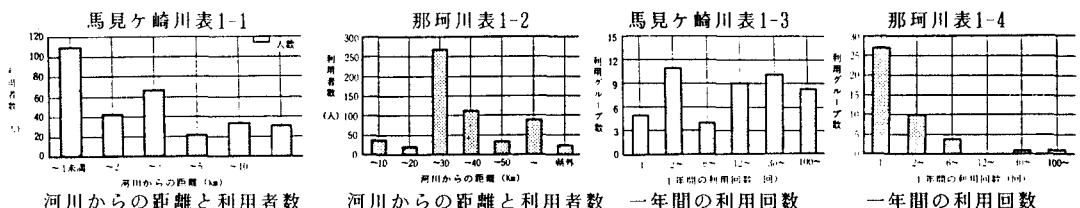
写真2-1 利用状況

図2-2 那珂川平面図

写真2-2 利用状況

① 河川からの距離と利用者数

表1-1、1-2から明らかなように、馬見ヶ崎川では1km未満の利用者数が全体の30%に達し圧倒的に多く5km圏内までに全体の80%に達した。これに対し、那珂川では20~30km付近から来ている人が最も多く、全体の45%をしめ、50km以上の人20%をしめた。このことから、せせらぎのある馬見ヶ崎川は、付近の住宅地からの利用が可能であり、安全であるため、小学生どうしによる利用や家族による利用が多かった。那珂川は遠方から利用にくるため、車等の交通手段が必要になり、家族を中心にした利用や引率者と共に小学生の団体利用が多く、子供どうしの利用は見られなかった。



河川からの距離と利用者数

河川からの距離と利用者数

一年間の利用回数

一年間の利用回数

② 一年間の利用回数

表1-3、1-4から明らかなように、馬見ヶ崎川では年間12回以上の利用グループが53%をしめ、100回以上の利用は16%をしめている。那珂川では、年間一回の利用が63%をしめ、12回以上の利用は5%に満たない。

以上のことから、馬見ヶ崎川のせせらぎは度々近所の子供たちが利用でき、水遊びや虫取り等が行われるため、河川への親近感の増大へとつながると思われる。

(2)大淀川における利用

宮崎県宮崎市を流れる一級河川大淀川には、高水敷上に伏流水をポンプアップした清流のせせらぎがあり、低水路のせせらぎの出口にはその水を利用したワンド状の河川プールが作られている。施設規模と夏季の利用状況は以下のとおりである。

- ・施設名 大淀川親水公園 ・整備期間 昭和61年～平成2年 ・整備箇所 大淀川橋樑～高松橋（左岸）
- ・せせらぎ利用幼児数約100人/日 ・水路幅4m、水路延長420m、水深約15cm
- ・河川プール利用小学生数約1000人/日 ・W=120m、L=200m、水深約70cm

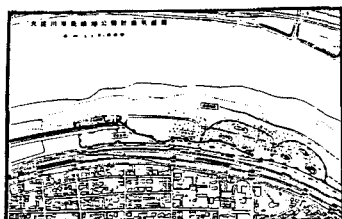


図2-3 大淀川平面図



写真2-3 せせらぎ利用状況



写真2-4 河川プール利用状況

大淀川におけるせせらぎは、学齢前の幼児と付き添いの父母等によって利用され、ワンド状の河川プールは小学生に利用されている。このように、大淀川では、年齢層が異なる子供たちが河川に親しみ、安全に水遊びができる多様な環境が整備されていることが把握された。

3. 今後の高水敷利用への一提案

写真3-1により、鴨川の現況を示した。鴨川右岸高水敷上には、せせらぎの原形ともいえるみそそぎ川（W=6.0m、L=2.3km）が流下している。そこでは、夏場の床を中心に多くの人が利用しているが、この状況は、図3-1の春朝斎の都名所図会〔四条河原夕涼の景〕安永9年（1780年）出版や図3-2の広重の浮世絵〔京都名所の内四条河原夕涼〕1829年頃出版に見ることができる。前者には、鴨川の本流と平行して流れる浅瀬の川が大きく描かれ、川に入る人や水際の床で夕涼みを楽しむ人々を見ることができるが、これは現在のみそそぎ川の前身と考えられる（図3-3〔四条橋新造之記〕1856年頃）。

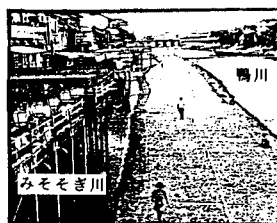


写真3-1 みそそぎ川と高水敷の利用状況

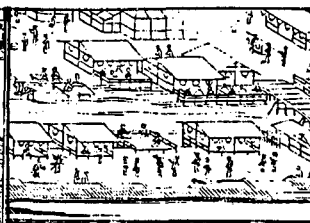


図3-1 都名所図会 部分 春朝斎画 四条河原夕涼之景

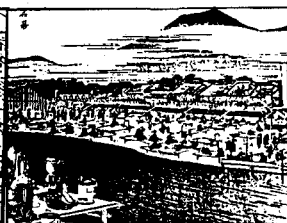


図3-2 京都名所の内 四条河原夕涼 広重画

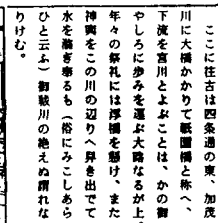


図3-3 みそそぎ川の由来

このように、高水敷のせせらぎは日本文化に基づく本来的なものであり、親しみやすい河川として様々な利用がなされてきた。

本文2の調査からも、せせらぎは近隣からの利用が圧倒的に多く、また、幼児も安全に利用できるなど優れた特質を有しており、今後は、さらにせせらぎを生かした河川空間利用および整備が望まれる。

また、都市に過度に人口が集中し、日本の原風景ともいえるふるさとの小川と触れ合う機会の少なくなった現在、高水敷にふるさとの小川＝せせらぎを再現することは大きな意味があるものと思われが、その際、仔稚魚や水生昆虫の棲息空間としての役割を再認識されるべきである。